

ポスト平成の未来学

第4部 暮らし新潮流 故人とつながる

「家から個へ」変化する弔いの形

葬儀や墓など弔いの形は「家から個」「慣習・儀礼から自由選択」「豪華から簡素」の流れだ。背後に人間関係と価値観の変化がある。

かつて葬儀は近所が協力し家や寺で営み、江戸時代からの檀家制度に由来する檀那寺が供養した。墓も家で継承した。ところが都市化と過疎化が同時に進行。大家族は核家族や単身世帯に姿を変え、地縁・血縁の結びつきが薄れた。

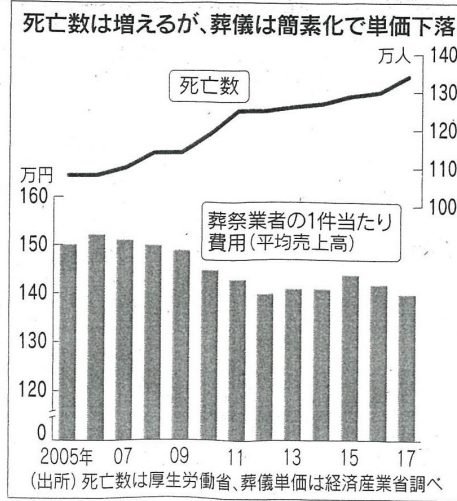
1990年代に葬儀会館での葬儀が増えたが、高齢化で参列者は減少。2000年代に少人数の家族葬、式がない直葬が増えた。関東では直葬が2割超だ。葬祭業者の1件当たり売上高は経済産業省によれば17年に約140万円と10年前より

10万円下落。葬祭市場は矢野経済研究所の推計で17年に約1兆8千億円だが伸びは緩やかだ。

第一生命経済研究所の小谷みどり主席研究員は「見えや世間体を重視しなくなり、高額出費や手間に意義を感じなくなった」とみる。所得の伸び悩みや介護費用の負担増の影響もある。

「お布施が高額で不透明」とみる消費者を意識し価格の透明化が進む。みんれび(東京・品川)は定額で葬儀プラン紹介や僧侶手配「お坊さん便」を展開。17年の手配相談は3年前の3.8倍、提携僧侶も同4.4倍の1千人超だ。

檀家制度が限界にきた寺院も動く。埼玉県熊谷市の見性院は「依存しては消滅する」(橋



本英樹住職)と12年に檀家制を廃止、門戸の広い会費無料の会員制とした。お布施も下げ定額表示、収支を公開した。永代供養墓は郵送でも遺骨を受ける。反発もあるが、信徒は約800人に倍増、葬儀・法要も増えて収入は約4倍に。「寺は再編され僧侶も選ばれる時代だ」

築地本願寺(東京・中央)はカフェや仏教書店を設け、僧侶らが銀座で講座も開く。「檀家制度の弱体化で寺と接点もなく不安を感じる人の人生に寄り添いたい」(安永雄玄宗務長)

墓の継承者は少子化と未婚化で減り、無縁墓が増えた。清掃代行や遠方の墓じまいが広がる。新たな墓は安価で管理が楽な納骨堂、合葬中心の樹木葬が人気。樹木葬は1999年に岩手県の寺が始めた。来月に全面開業する東京都八王子市の「風の丘樹木葬墓地」は高台に芝生の丘や献

花台、位牌(いはい)堂などがある。夫が眠るという女性(72)は「娘に苦勞をかけずに済む。見晴らしも良くすがすがしい所」と話す。

弔いは変われど悼む心は消えない。葬儀に呼ばれずしのび足りない人が平服のお別れ会を開き始めた。手作りの会が特徴の鎌倉自宅葬儀社(神奈川県鎌倉市)も受注を伸ばす。遺骨の一部を装身具などに納める手元供養も広がる。

葬儀社のティアの調査では自分の葬儀を望まない人が約6割だが配偶者や両親にはしてあげたい人が8割。弔いは残された人が心を整理する意味もある。悔やまぬよう生前相談が大切。小谷氏は「温かく見送ってもらえる人間関係を築けるといい」と話す。(相馬真依、大林広樹)

ご意見や情報をmiraigaku@nex.nikkei.co.jpにお寄せください。